

# 第6部 保護者の状況

## 1 保護者の就労状況

### (1) 父母の就労状況

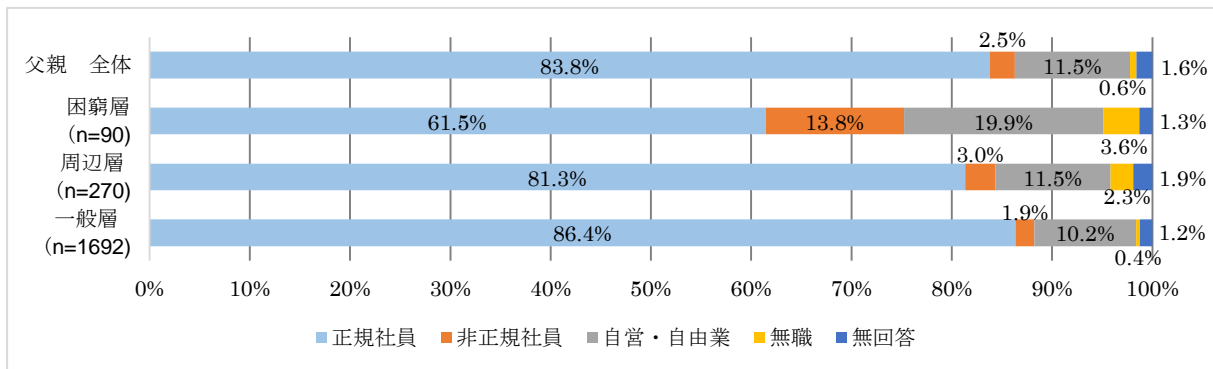
#### ①父親

同居の父親の就労状況を聞いたところ、小学5年生の父親の83.8%は「会社役員」、「民間企業の正社員」、「公務員などの正職員」、「団体職員」(以下、正規社員)であり、次に多いのが「自営業(家族従事者を含む)」、「自由業」、「その他の働き方」(以下、自営・自由業)の11.5%、「契約社員・派遣社員・嘱託職員」、「パート・アルバイト・日雇い・非常勤職員」(以下、非正規社員)が2.5%であった(「わからない」及び父親がいない場合は集計に含めていない)。世帯タイプ別には、就労状況の分布に違いはなかったものの、生活困難度別には、困窮層が周辺層・一般層と比べて非正規社員、自営・自由業の割合が高い。

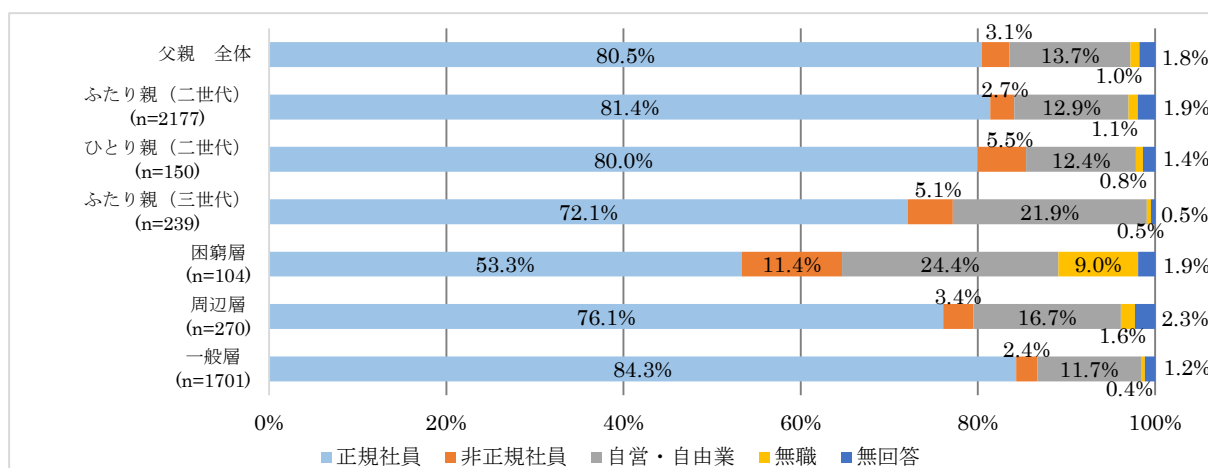
中学2年生の父親の就労状況は、全体では小学5年生の父親とほとんど変わらないものの、困窮層において正規社員の割合が低くなっている。困窮層の父親のうち、正規社員は53.3%であり、自営・自由業24.4%、無職が9.0%となっている。この傾向は、16-17歳の父親においても見られ、困窮層の父親で正規社員は50.0%、自営・自由業は25.3%、無職も14.4%となっている。

また、中学2年生、16-17歳では、小学5年生では見られなかった世帯タイプ別の違いが確認され、中学2年生ではふたり親(三世代)世帯で自営・自由業の割合が高く、16-17歳では、ふたり親(三世代)世帯、ひとり親(二世代)世帯で自営・自由業の割合が高い。

図表 6-1-1 父親の就労状態(小学5年生):全体+生活困難度別(\*\*\*)

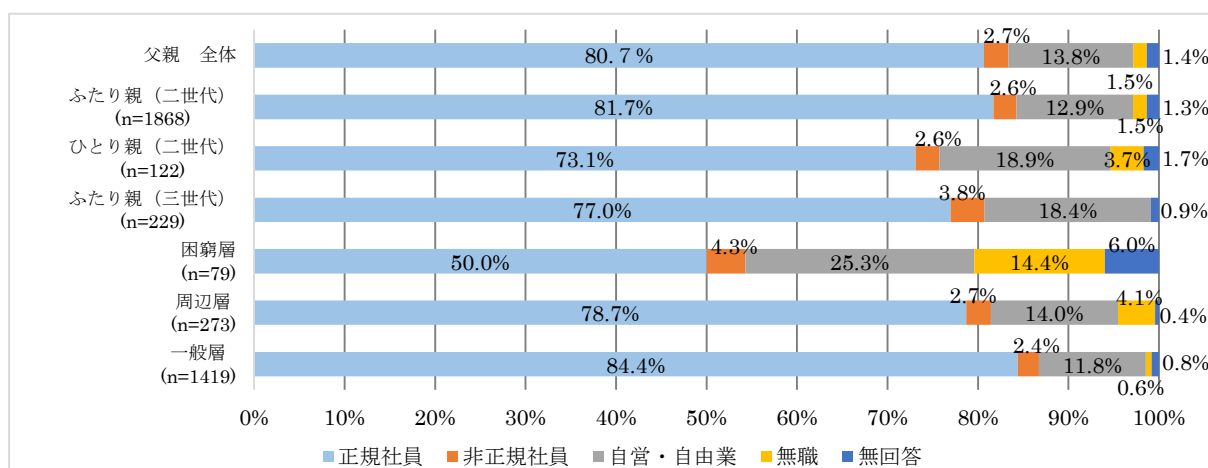


図表 6-1-2 父親の就労状態(中学 2 年生):全体+世帯タイプ別(\*\*)、生活困難度別(\*\*\*)



※父子家庭のひとり親 (三世帯) 世帯のサンプル数が少ないため、図表 6-1-2~6 について集計から除く。

図表 6-1-3 父親の就労状態(16-17 歳):全体+世帯タイプ別(\*\*\*)、生活困難度別(\*\*\*)



## ②母親

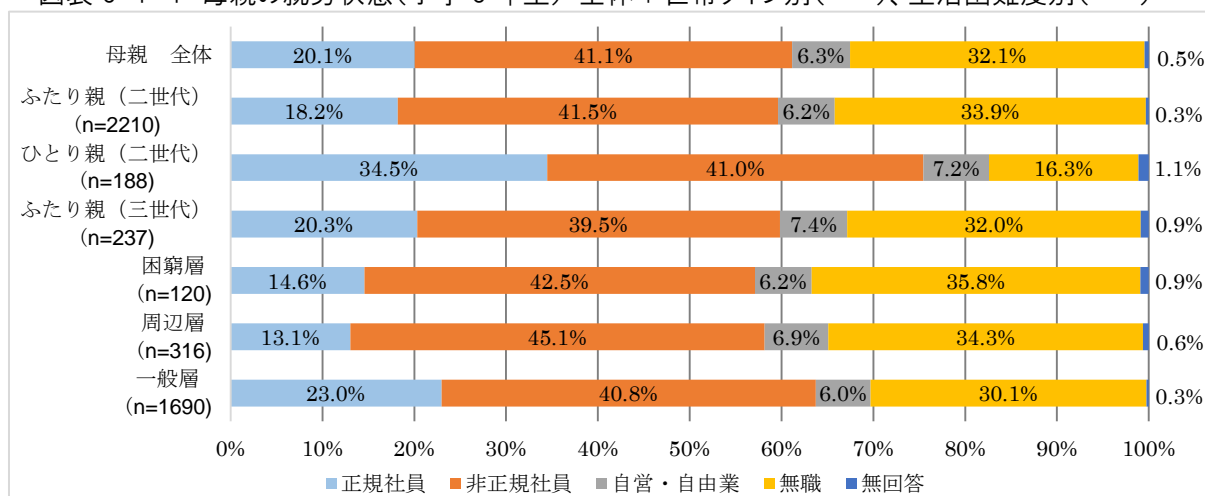
同居の母親の就労状況を聞いたところ、小学 5 年生の母親の就労状況で最も多いのが非正規社員の 41.1%、次が無職の 32.1%であった。正規社員は 20.1%、自営・自由業は 6.3%であり(「わからない」及び母親がいない場合は集計に含めていない)、母親全体の約 7 割が働いている。世帯タイプ別には、ふたり親世帯(二世帯・三世帯)の母親は無職の割合が高い。生活困難度別には、一般層は、正規社員の割合が 23.0%と、困窮層、周辺層より約 10 ポイント高く、困窮層・周辺層は非正規社員、自由・自営業、無職の割合が高い。

中学 2 年生の母親では、小学 5 年生より無職の割合が低くなり、非正規社員の割合が増える。中学 2 年生の母親の約半数が非正規社員である。世帯タイプ別では、小学 5 年生と同様に、ふたり親世帯で無職の割合が高く、ひとり親(二世帯)世帯で正規社員の割合が高い。生活困難度別では、小学 5 年生同様、一般層の正規社員の割合が困窮層・周辺層よりも高い。また、困窮層では一般層よりも非正規社員の割合が高く、周辺層では無職の割合が高い。

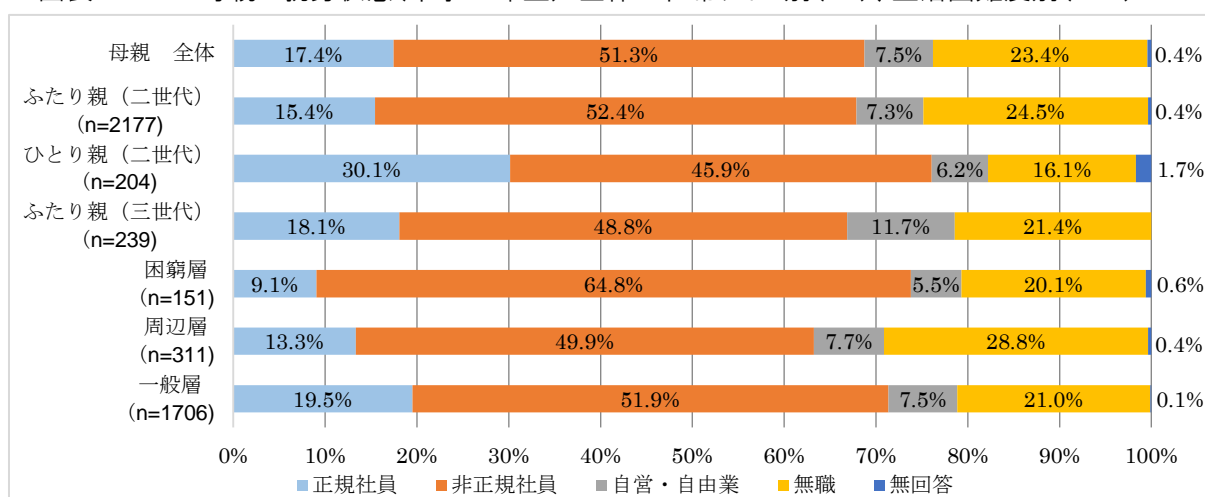
16-17 歳では、中学 2 年生に比べ、無職がさらに減り、正規社員の割合が高くなっている。世帯タイプ別の傾向は他の年齢と同様、ふたり親世帯で無職の割合が高く、ひとり親(二世帯)

世帯で正規社員の割合が高い。生活困難度別では、他の年齢と異なり、正規社員の割合に大きな差はないが、一般層の非正規社員の割合が低く、困窮層の無職の割合が高い。

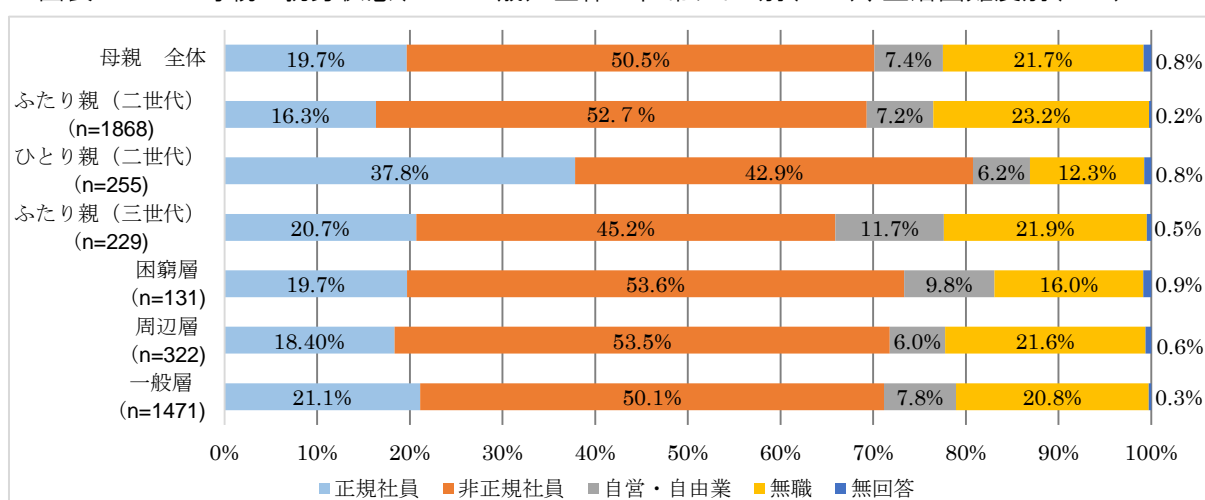
図表 6-1-4 母親の就労状態(小学5年生):全体+世帯タイプ別(\*\*\*)、生活困難度別(\*\*\*)



図表 6-1-5 母親の就労状態(中学2年生):全体+世帯タイプ別(\*\*)、生活困難度別(\*\*\*)



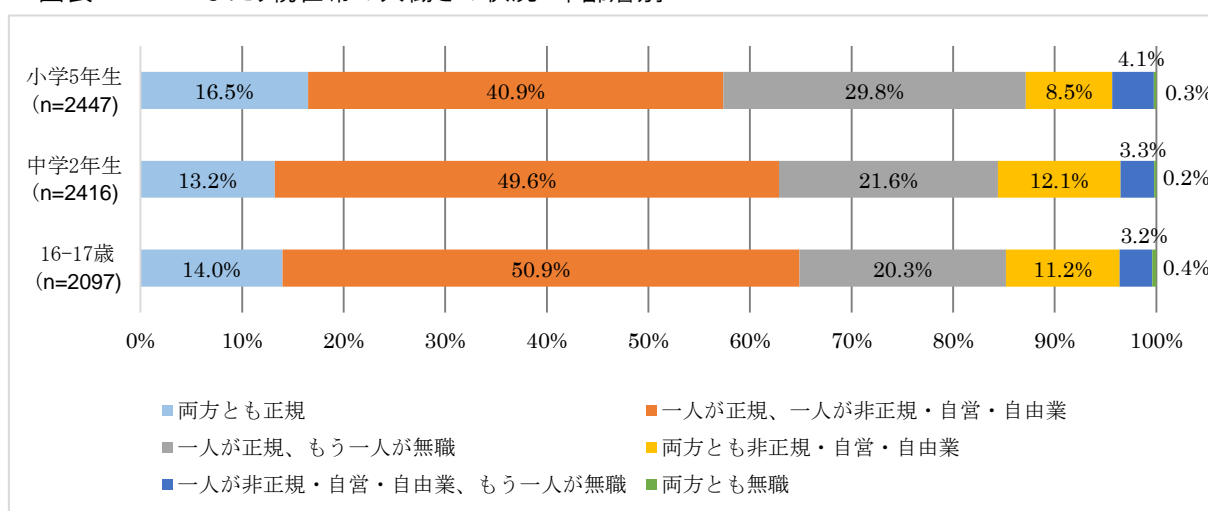
図表 6-1-6 母親の就労状態(16-17歳):全体+世帯タイプ別(\*\*\*)、生活困難度別(\*\*\*)



## (2) 共働きの状況

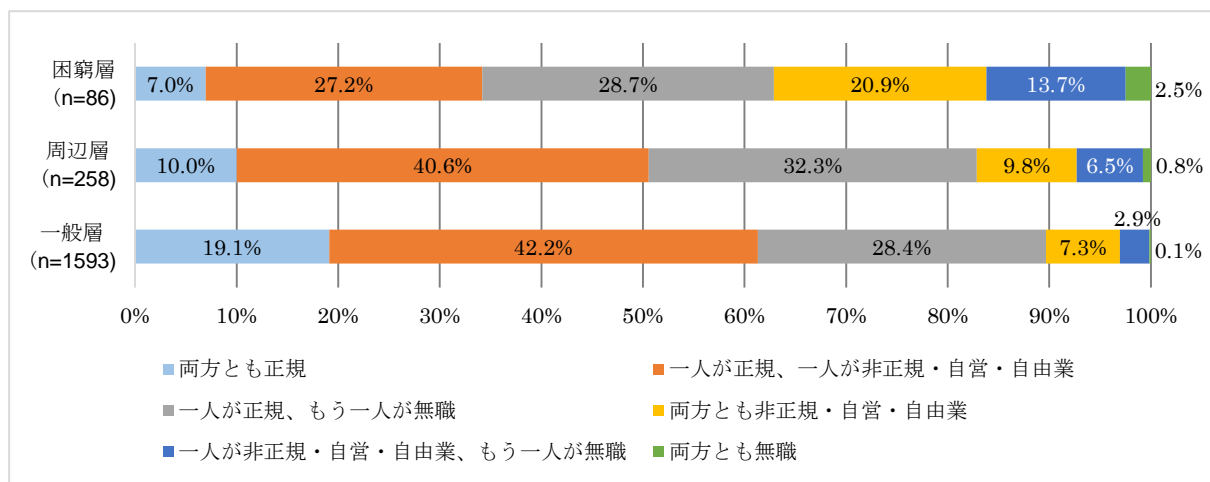
世帯全体の就労状況、共働きの状況は、家計の安定性のみならず、子供の家庭環境や生活にも大きな影響を与える。そこで、ふたり親世帯にサンプルを限って、母親の就労状況と父親の就労状況から、世帯全体での就労状況を見た。その結果、どの年齢層においても、最も割合が高いのが「一人が正規、一人が非正規・自営・自由業」であり、小学5年生では40.9%、中学2年生では49.6%、16-17歳では50.9%であった。次に高いのが「一人が正規、もう一人が無職」であり、小学5年生で29.8%、中学2年生で21.6%、16-17歳で20.3%である。両親ともフルタイムで働いていると考えられる「両方とも正規」は、それぞれ16.5%、13.2%、14.0%である。「両方とも非正規・自営・自由業」であったのは、それぞれ8.5%、12.1%、11.2%であり、1割程度のふたり親世帯の子供が該当する。「一人が非正規・自営・自由業、もう一人が無職」「両方とも無職」も約3~4%の子供が該当した。

図表 6-1-7 ふたり親世帯の共働きの状況：年齢層別

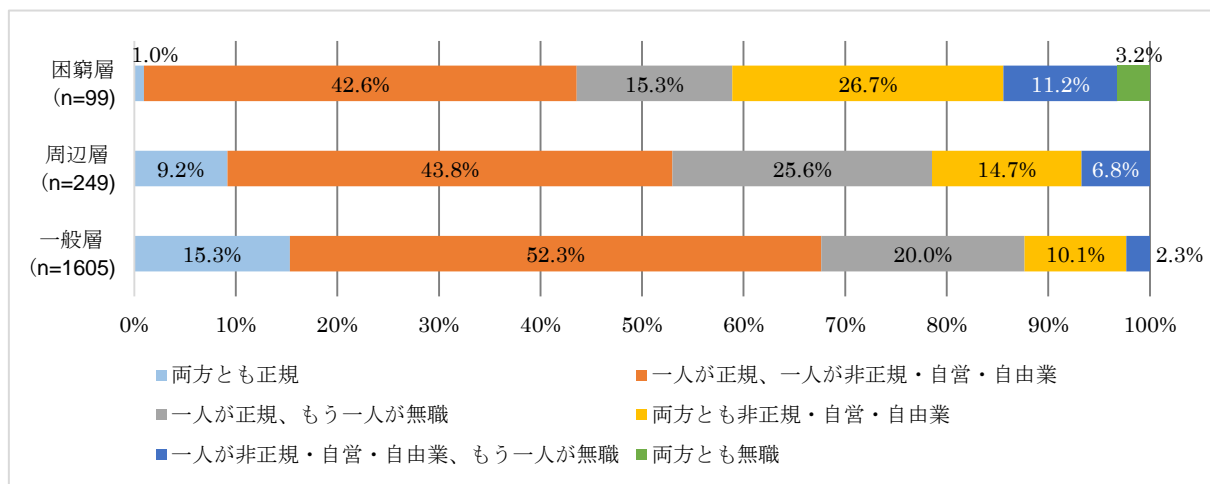


生活困難度別に見ると、生活困難度が高いほど、両親のどちらも正規社員でない世帯（「両方とも非正規・自営・自由業」、「一人が非正規・自営・自由業、もう一人が無職」、「両方とも無職」）の割合が高くなっている。困窮層のふたり親世帯では、どの年齢層も約4割が両親のどちらも正規社員ではない。また、「一人が正規、もう一人が無職」の割合は、小学5年生ではどの層にも3割程度見られるものの、子供の年齢が上がるとともに低くなり、困窮層では16-17歳になると約20ポイント低くなる。

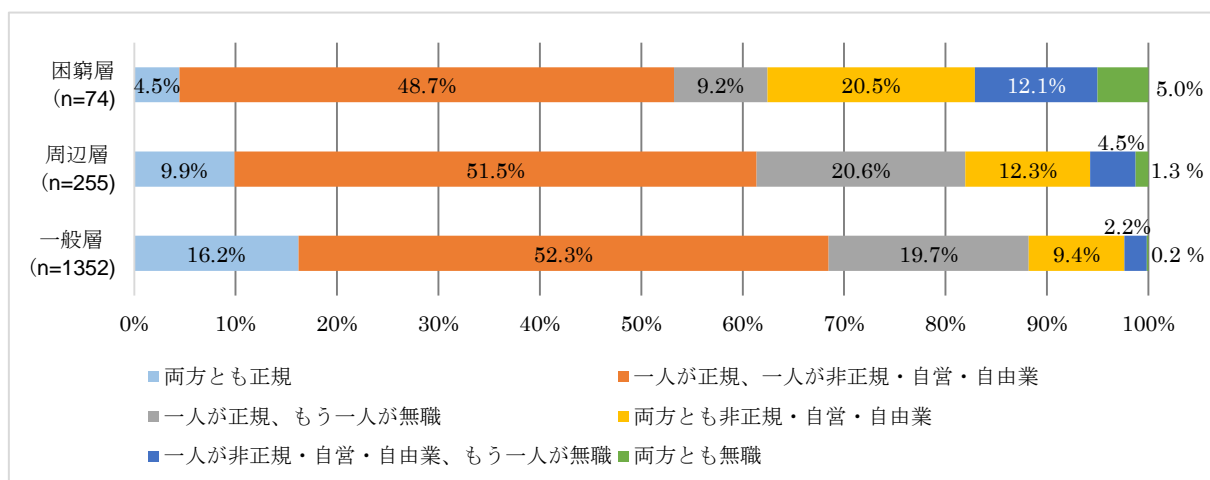
図表 6-1-8 ふたり親世帯の共働きの状況(小学5年生):生活困難度別(\*\*\*)



図表 6-1-9 ふたり親世帯の共働きの状況(中学2年生):生活困難度別(\*\*\*)



図表 6-1-10 ふたり親世帯の共働きの状況(16-17歳):生活困難度別(\*\*\*)

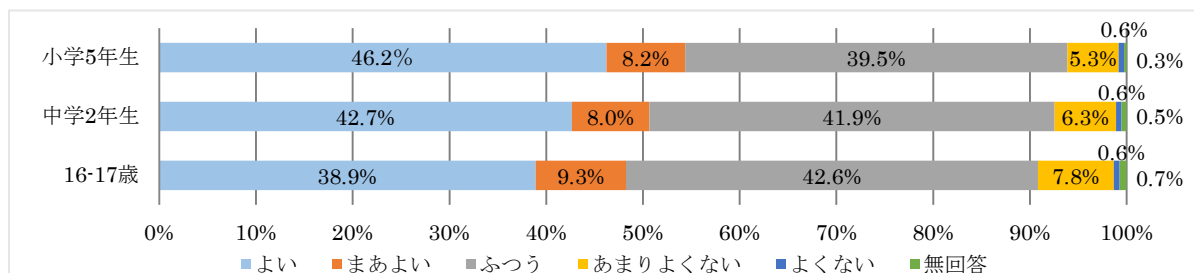


## 2 保護者の健康状態と精神的ストレス

### (1) 保護者の健康状態

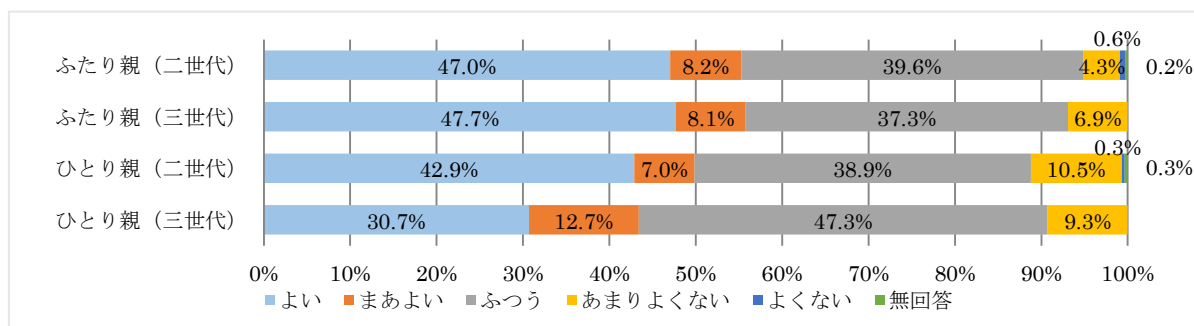
保護者（回答者）の健康状態は、「よい」と回答した人が約4～5割となっており、「まあよい」「ふつう」を合わせると、約9割以上の保護者の主観的な健康状態は良好であるものの、「あまりよくない」とする保護者が小学5年生では5.3%、中学2年生では6.3%、16-17歳では7.8%存在した。全体的な傾向として、年齢の高い子供を持つ保護者の方が、「あまりよくない」と回答する割合が高い。

図表 6-2-1 保護者の健康状態：年齢層別

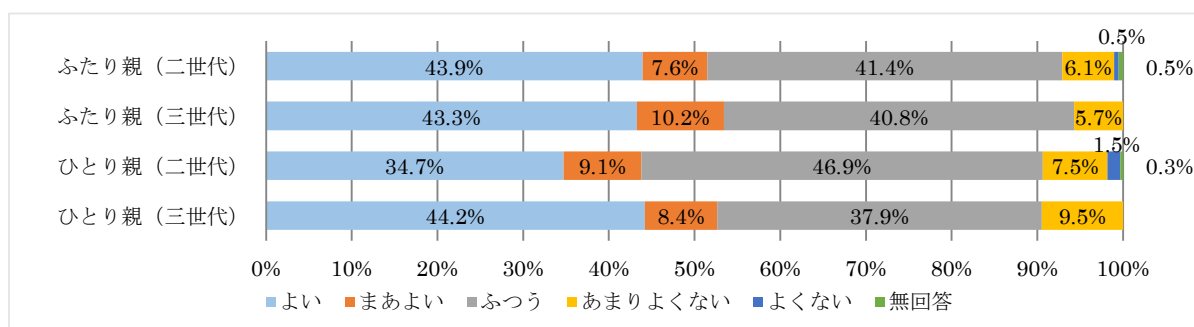


保護者の健康状態を、世帯タイプ別、生活困難度別に見ると、小学5年生、中学2年生、16-17歳の子供を持つ保護者でいずれも統計的に有意な差が見られた。世帯タイプ別に見ると、健康状態が「よい」と回答した割合がもっとも低かったのは、小学5年生を持つ保護者では、ひとり親（三世代）世帯であり（30.7%）、ほかの世帯タイプの親に比べて低い。中学2年生と16-17歳の保護者では、いずれもひとり親（二世代）世帯がよくない状態である。

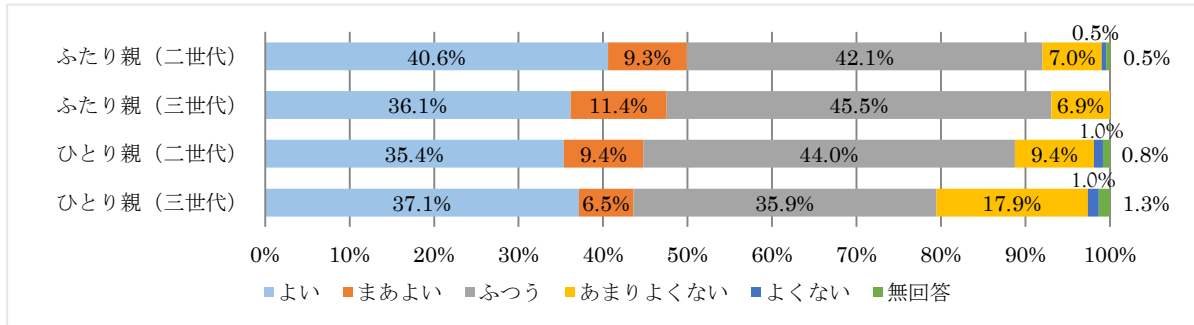
図表 6-2-2 保護者の健康状態(小学5年生):世帯タイプ別(\*\*\*)



図表 6-2-3 保護者の健康状態(中学2年生):世帯タイプ別(\*)

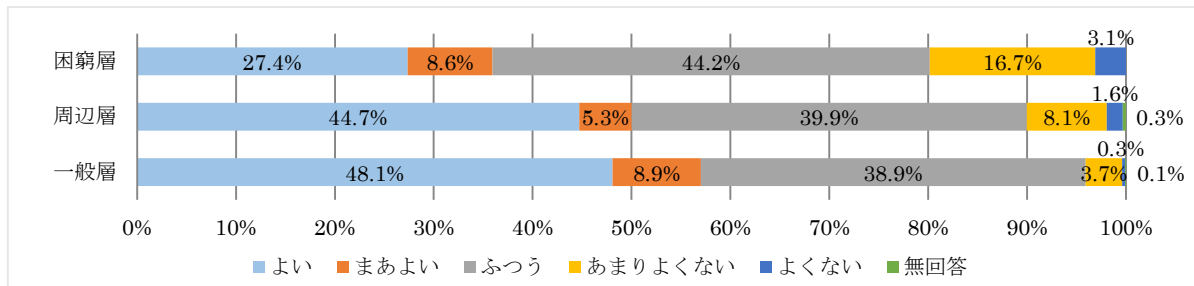


図表 6-2-4 保護者の健康状態(16-17 歳):世帯タイプ別(\*\*)

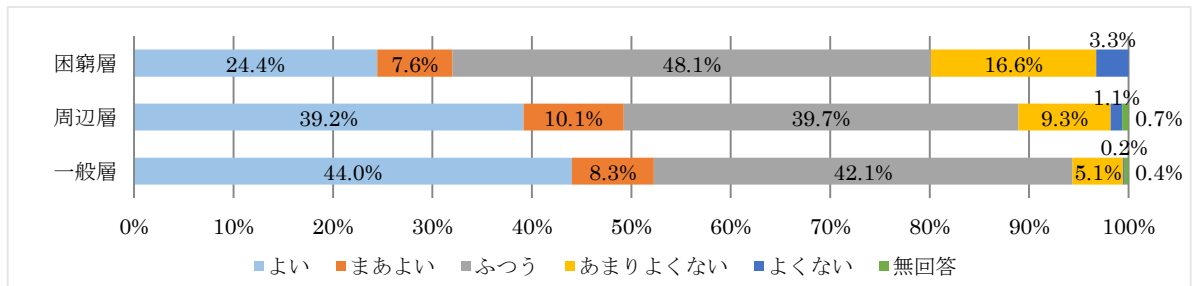


生活困難度別で見ると、困窮層で健康状態が「よくない」と回答した保護者は、小学 5 年生が 3.1%、中学 2 年生が 3.3%、16-17 歳が 3.7%である (一般層では 0.2~0.3%)。また、困窮層では、子供の年齢が高いほど、保護者の健康状態が「よくない」傾向がある。

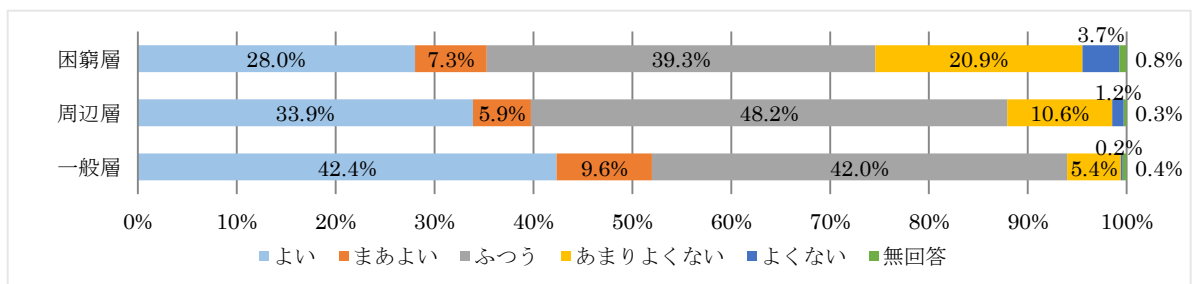
図表 6-2-5 保護者の健康状態(小学 5 年生):生活困難度別(\*\*\*)



図表 6-2-6 保護者の健康状態(中学 2 年生):生活困難度別(\*\*\*)



図表 6-2-7 保護者の健康状態(16-17 歳):生活困難度別(\*\*\*)



## (2) 保護者の抑うつ傾向

一般にうつ傾向を測る指標として普及している K6 指標を用いて、保護者（回答者）の抑うつ傾向を測定した（K6 指標については第 5 部（141 頁）参照）。なお、基本的に 1 名の保護者に保護者票を回答してもらっているため、ここでいう「保護者」は母親が多い点は留意されたい（回答者については 3 頁～5 頁参照）。

これによると、「心理的ストレス反応相当」と判断されるのは、小学 5 年生の保護者では 31.6%、中学 2 年生の保護者では 31.8%、16-17 歳の保護者では 32.3%であった。社会生活に困難をきたすとされている「重症精神障害相当」と判断されるのは、それぞれ 4.2%、4.7%、5.3%である。

図表 6-2-8 保護者の抑うつ傾向

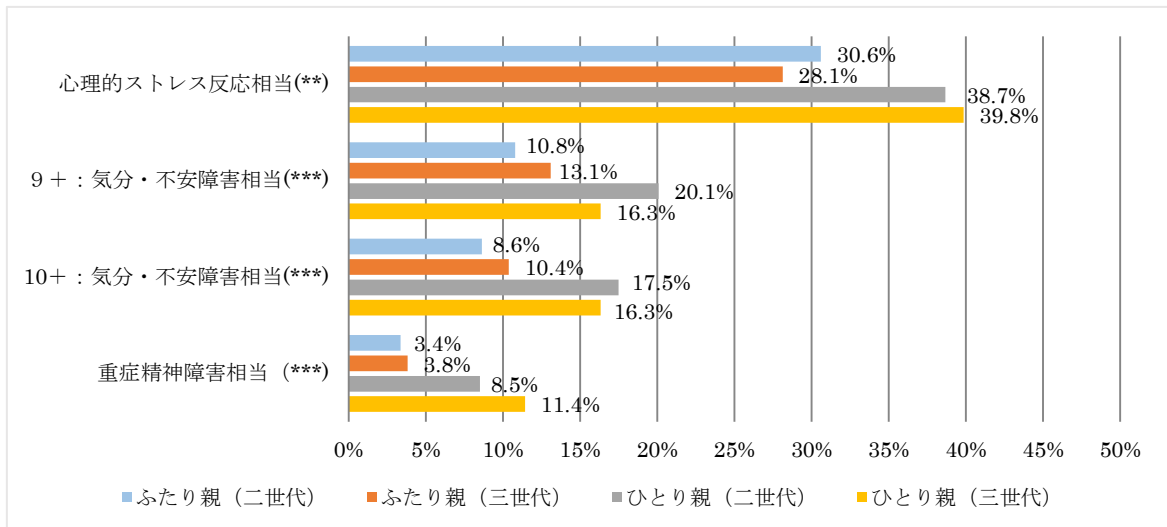
抑うつ傾向（あり）	小学 5 年生		中学 2 年生		16-17 歳	
	度数	割合	度数	割合	度数	割合
心理的ストレス反応相当	885	31.6%	387	31.8%	834	32.3%
9+：気分・不安障害相当	342	12.1%	387	13.5%	378	14.7%
10+：気分・不安障害相当	281	10.0%	318	11.0%	299	11.6%
重症精神障害相当	118	4.2%	134	4.7%	134	5.3%

世帯タイプ別では、すべての年齢層で、ひとり親（二世代）世帯及びひとり親（三世代）世帯の保護者に抑うつ傾向のある割合が高い。特に「心理的ストレス反応相当」は、三世代同居のひとり親の約 4 割に見られる。「重症精神障害相当」も、ひとり親（三世代）世帯では約 1 割、ひとり親（二世代）世帯においても 8%以上であり、ひとり親世帯の保護者が精神的に厳しい状況に置かれていることがわかる。

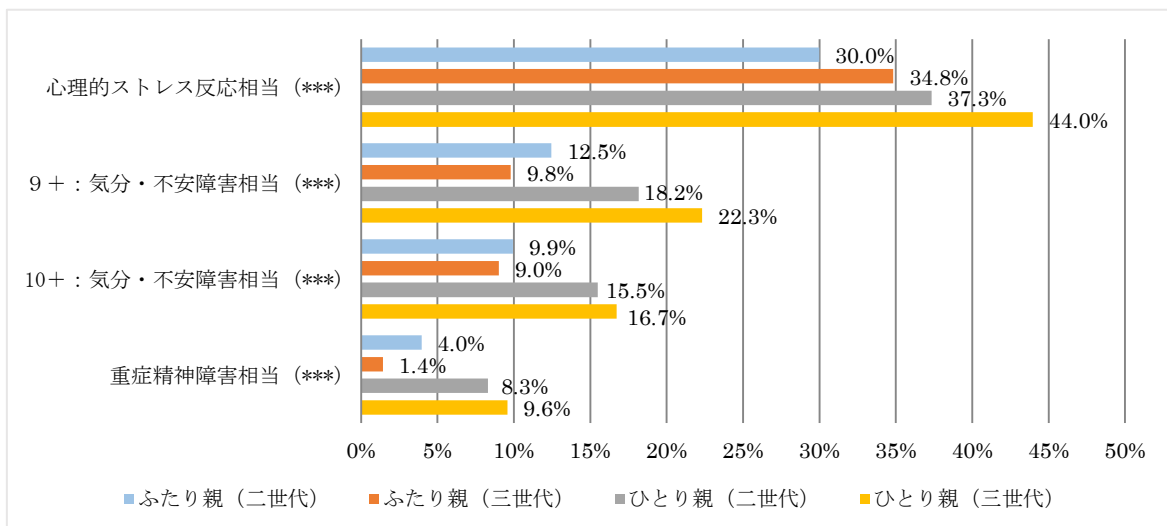
また、三世代同居は、子育てや経済的な支援を祖父母から受けやすいと考えられがちであるが、祖父母との同居が必ずしも精神的なゆとりをもたらすものでないことが示唆される。



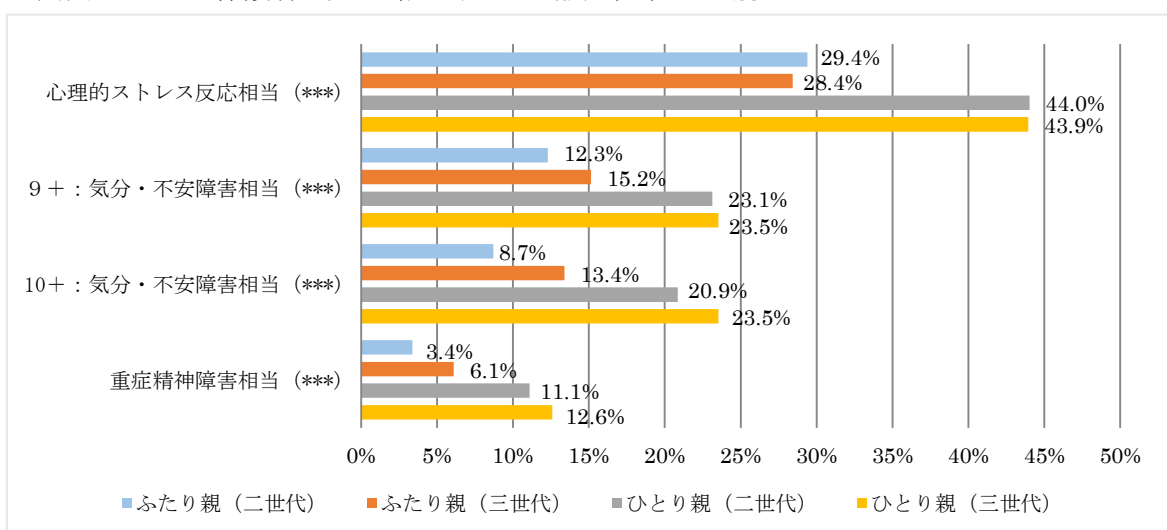
図表 6-2-9 保護者の抑うつ傾向(小学 5 年生):世帯タイプ別



図表 6-2-10 保護者の抑うつ傾向(中学 2 年生):世帯タイプ別

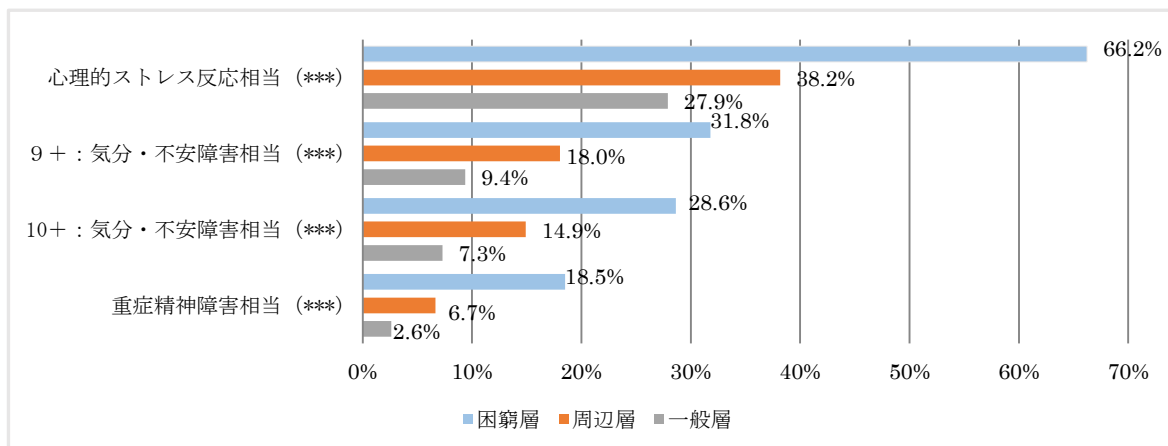


図表 6-2-11 保護者の抑うつ傾向(16-17 歳):世帯タイプ別

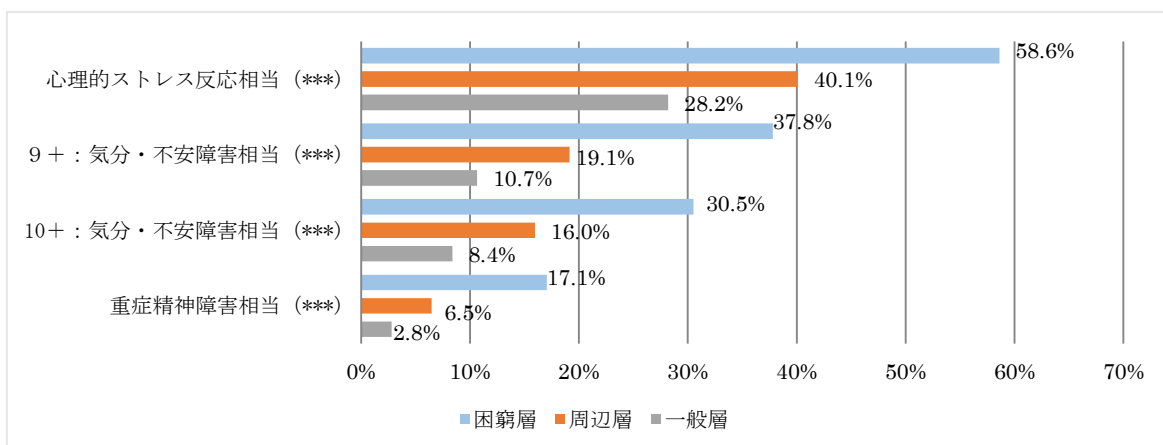


生活困難度別では、小学5年生、中学2年生、16-17歳いずれにおいても、困窮層の約6~7割の保護者が、何らかの心理的ストレスを抱えている。また、「重症精神障害相当」の保護者の割合も高く、小学5年生では18.5%、中学2年生では17.1%、16-17歳では24.8%となっており、周辺層と比較してもその割合は高い。

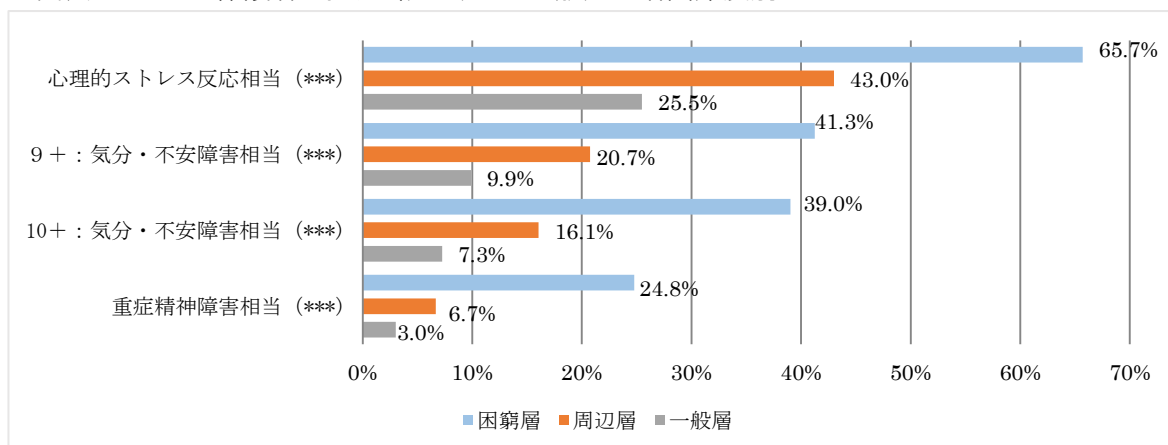
図表 6-2-12 保護者の抑うつ傾向(小学5年生):生活困難度別



図表 6-2-13 保護者の抑うつ傾向(中学2年生):生活困難度別



図表 6-2-14 保護者の抑うつ傾向(16-17歳):生活困難度別



### 3 親子の時間

#### (1) 親子での過ごし方

親子の過ごし方を調べるにあたり、本調査では小学5年生、中学2年生、16-17歳の保護者に、「勉強をみる」、「〇〇をして遊ぶ」、「〇〇の話をする」、「料理をする」、「外出する」の項目について、親子でどのくらいの頻度で行っているかを聞いた。ただし、16-17歳の保護者に対しては、勉強や遊びに関する項目を除外した。

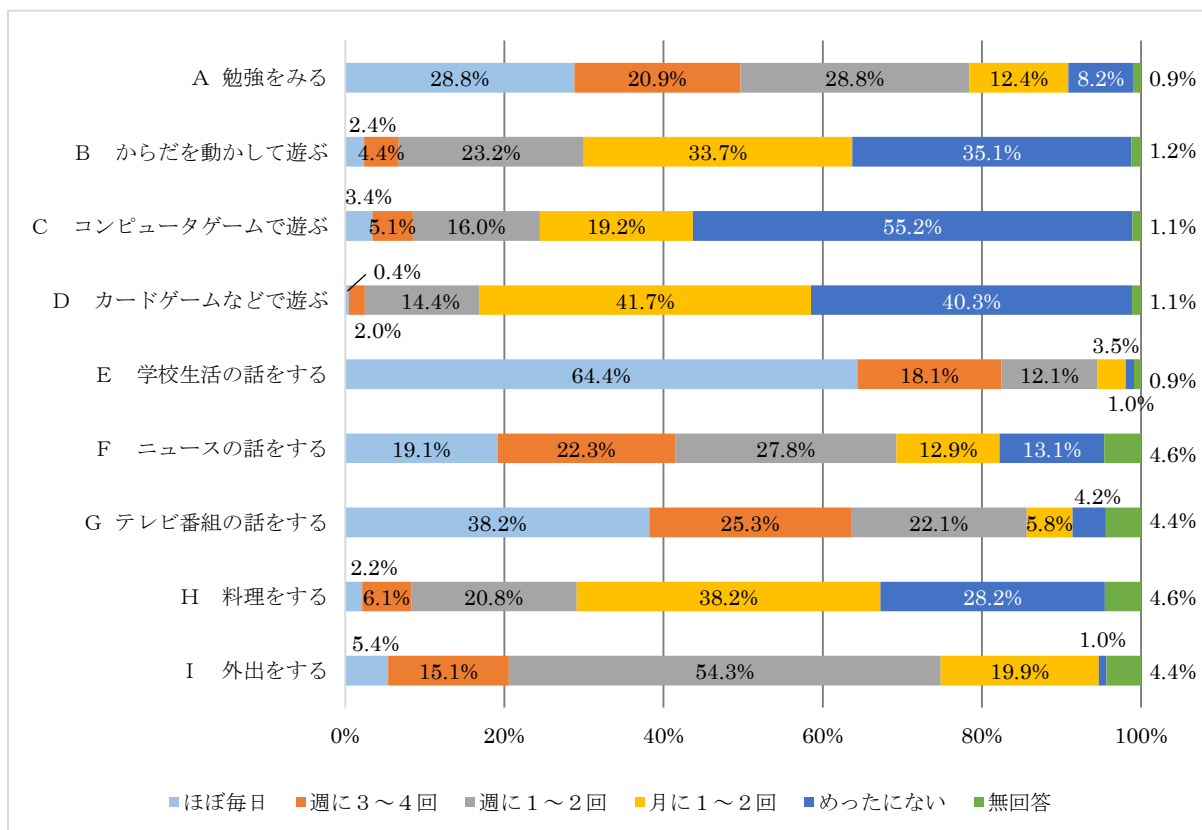
「子供の勉強」を「ほぼ毎日」みる小学5年生の保護者は28.8%で、「めったにない」は8.2%であった。中学2年生になると「ほぼ毎日」みるは7.4%、「めったにない」は38.6%となり、勉強を子供に任せる傾向が強くなる。

「子供とからだを動かして遊ぶ」など、遊びに関する項目では、小学5年生の保護者は、週1回以上（「ほぼ毎日」、「週3～4回」、「週1～2回」）が約2割～約3割、「めったにない」が約4割～6割であるが、中学2年生になると、週1回以上は約5～14%と低くなり、「めったにない」が約7割である。

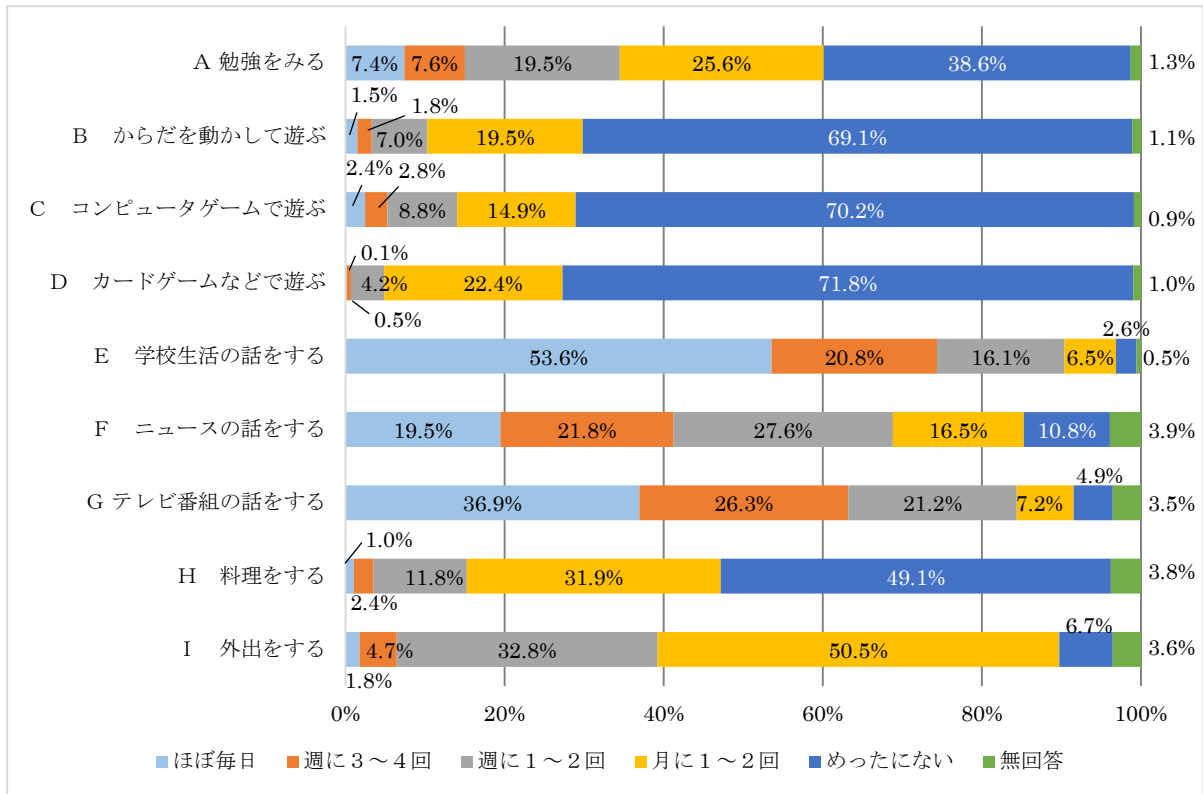
小学5年生、中学2年生、16-17歳の保護者すべてで、「ほぼ毎日」と回答している割合が最も高い項目は「子供と学校生活の話をする」であり、「学校生活」は親子の会話の主要なトピックである。しかし、小学5年生では64.4%、中学2年生で53.6%、16-17歳で44.3%と、年齢が上がるにつれ、「ほぼ毎日」と回答する割合が減っている。

また「外出する」については、小学5年生は「週に1～2回」、中学2年生と16-17歳は「月1～2回」と答える割合が半数を超えており、小学5年生とそれ以上で、外出の頻度が異なる。

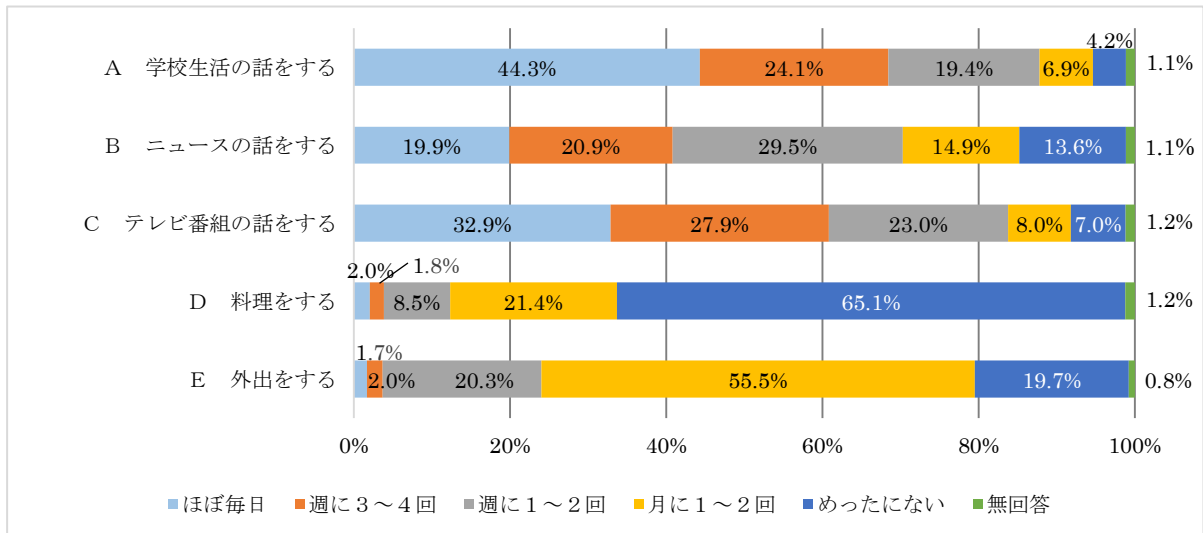
図表 6-3-1 親子での過ごし方(小学5年生)



図表 6-3-2 親子での過ごし方(中学 2 年生)



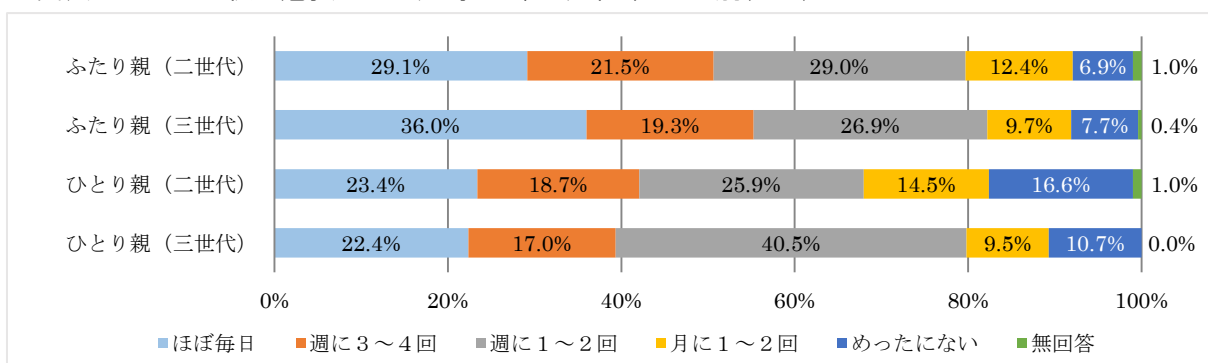
図表 6-3-3 親子での過ごし方(16-17 歳)



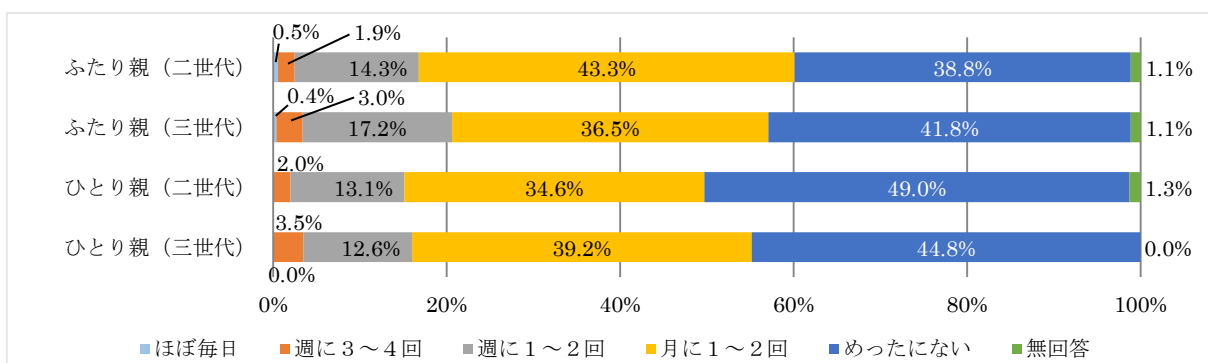
世帯タイプ別で見ると、保護者が勉強をみたり遊んだりする関わりについては、小学5年生では統計的に有意な差が見られたが、中学2年生では有意差は見られなかった。一方、会話での関わりについては、中学2年生で統計的に有意な差が見られたが、小学5年生では有意差は見られなかった。16-17歳で統計的に有意な差があった項目は「ニュースの話をする」のみであった。

小学5年生の保護者が勉強をみる頻度については、ひとり親で「ほぼ毎日」と答える割合が低く、最も低かったのはひとり親（三世代）世帯で、22.4%だった。子供とカードゲームなどで遊ぶ頻度は、ひとり親（二世帯）世帯で49.0%が「めったにない」と回答した。ひとり親世帯では、勉強や遊びの形で親子が関わる頻度がふたり親世帯に比べて低いことがわかる。

図表 6-3-4 子供の勉強をみる(小学5年生):世帯タイプ別(\*\*\*)

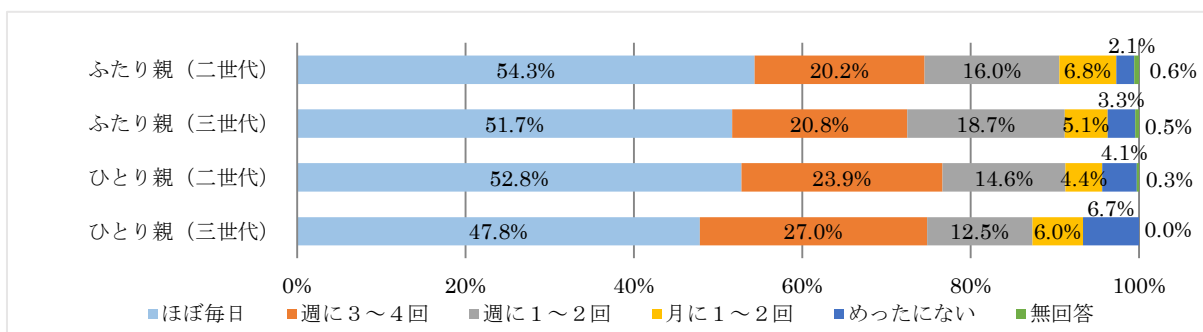


図表 6-3-5 子供とカードゲームなどで遊ぶ(小学5年生):世帯タイプ別(\*)

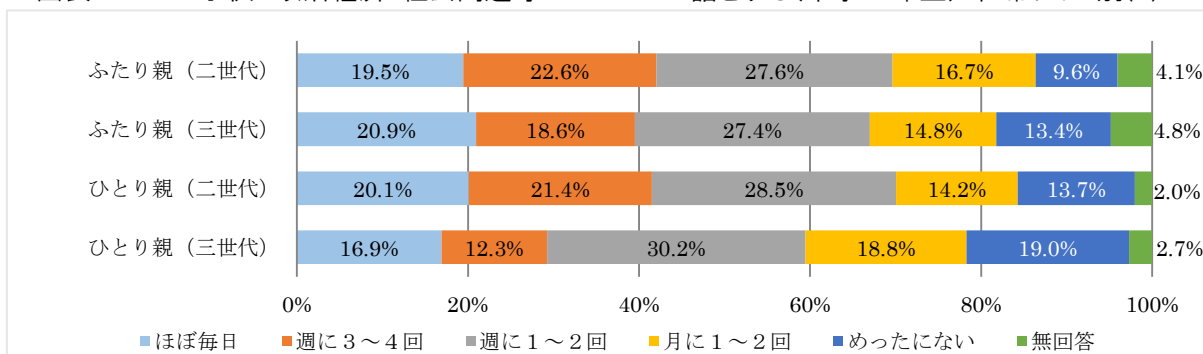


中学2年生の保護者と子供の会話の頻度を世帯タイプ別に見ると、学校生活について「ほぼ毎日」話すとは回答した割合が最も高いのはふたり親（二世帯）世帯の54.3%で、次がひとり親（二世帯）世帯の52.8%、最も低いのはひとり親（三世代）世帯の47.8%であった。ニュースの話を親子で週3回以上（「ほぼ毎日」、「週3~4回」）するのは、二世帯世帯よりも三世代世帯の方が低く、ひとり親（三世代）世帯では29.2%と他の世帯（約4割）よりも低い。ニュースの話をすることが「めったにない」家庭は、ひとり親（三世代）世帯の19.0%を占める。16-17歳でも同様の傾向がみられ、ニュースの話をすることが「めったにない」のは三世代世帯（ふたり親、ひとり親）で高く、ふたり親（三世代）世帯で19.8%、ひとり親（三世代）世帯では22.6%だった。

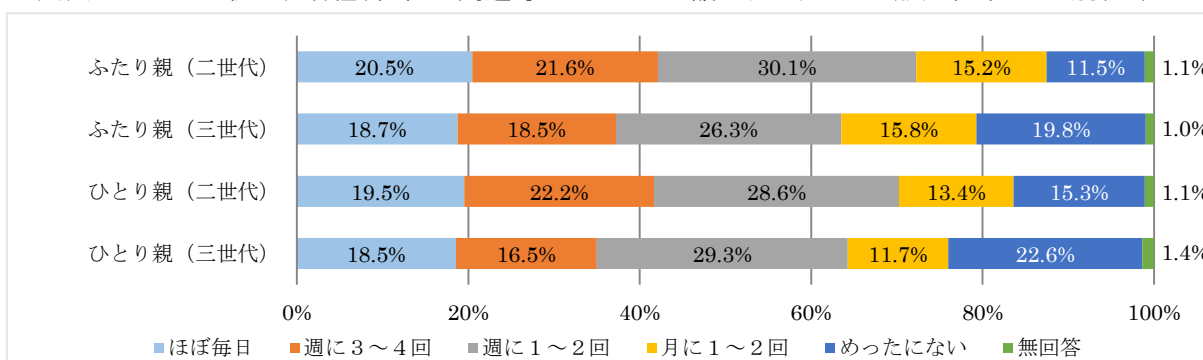
図表 6-3-6 子供と学校生活の話をする(中学 2 年生):世帯タイプ別(\*)



図表 6-3-7 子供と政治経済・社会問題等のニュースの話をする(中学 2 年生):世帯タイプ別(\*)

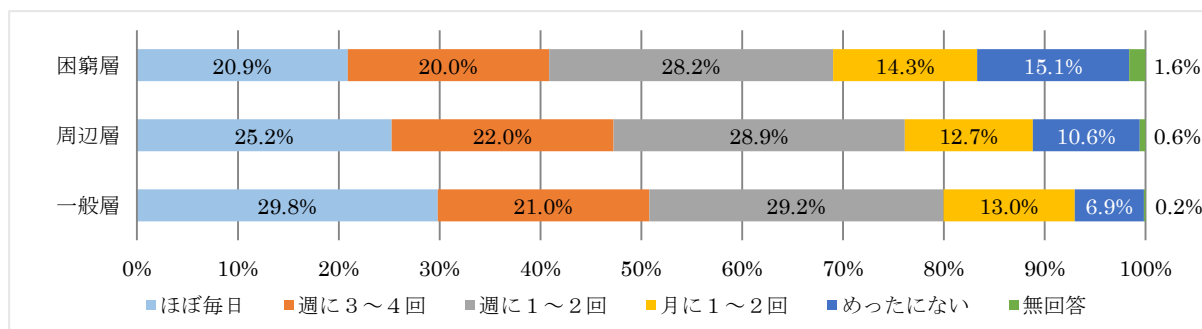


図表 6-3-8 子供と政治経済・社会問題等のニュースの話をする(16-17 歳):世帯タイプ別(\*\*)

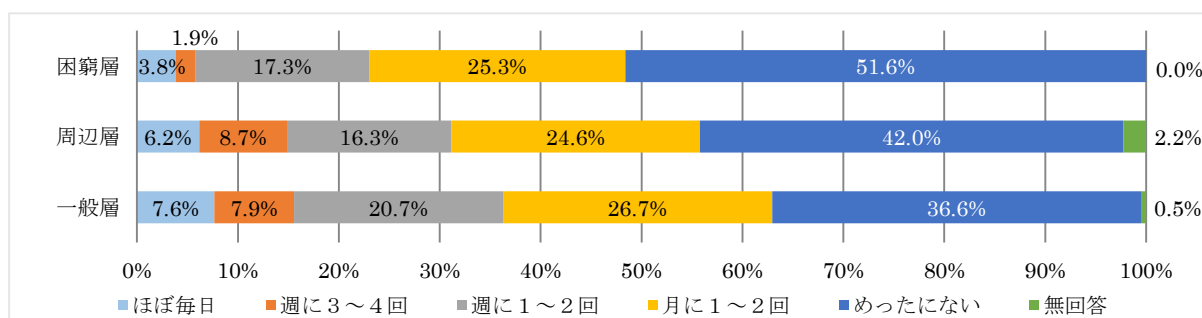


生活困難度別でみると、小学 5 年生においては、子供の勉強を「ほぼ毎日」みると回答した保護者は、一般層が 29.8%であるのに対し、困窮層は 20.9%である。困窮層の 15.1%が「めったにない」と回答しており、一般層の 6.9%と比較すると、8.2 ポイントの差がある。この傾向は中学 2 年生の保護者も同様である。一般層の 15.5%が週 3 回以上(「ほぼ毎日」、「週 3~4 回」)勉強をみると回答しているのに対し、困窮層は 5.7%である。困窮層の 51.6%の保護者が「めったにない」と回答しており、一般層の 36.6%と比較して 15 ポイントの差があった。

図表 6-3-9 子供の勉強をみる(小学 5 年生):生活困難度別(\*\*\*)

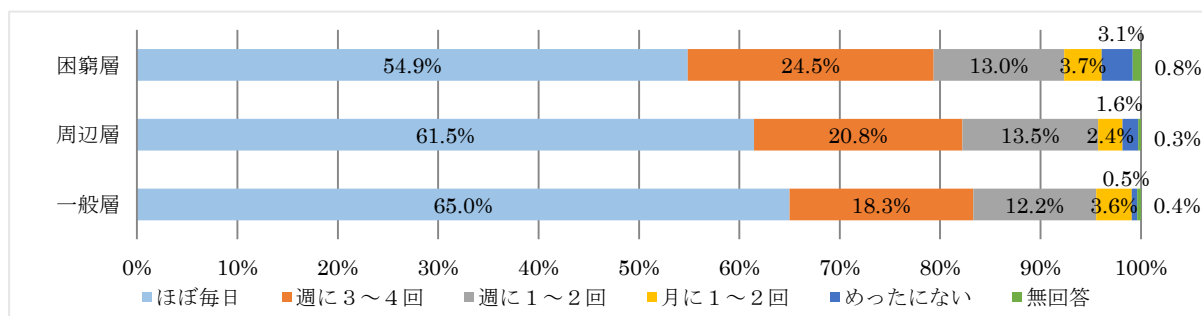


図表 6-3-10 子供の勉強をみる(中学 2 年生):生活困難度別(\*\*\*)

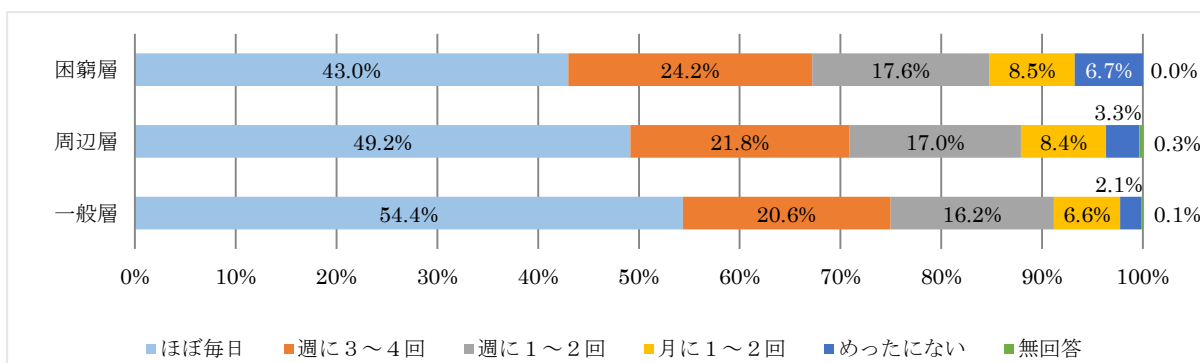


学校生活の話をする「ほぼ毎日」する頻度は困窮層ほど低い傾向にあり、小学 5 年生の保護者は、一般層が 65.0%であるのに対して困窮層では 54.9%、中学 2 年生の保護者は、一般層が 54.4%であるのに対して困窮層では 43.0%、16-17 歳の保護者は、一般層が 45.8%であるのに対して困窮層は 35.5%と、どの年齢層でも約 10 ポイントの差がある。また、「めったにない」と回答する割合は、小学 5 年生及び中学 2 年生の保護者では困窮層が最も高く、それぞれ 3.1%、6.7%である。16-17 歳の保護者では周辺層が最も高く、6.0%である。

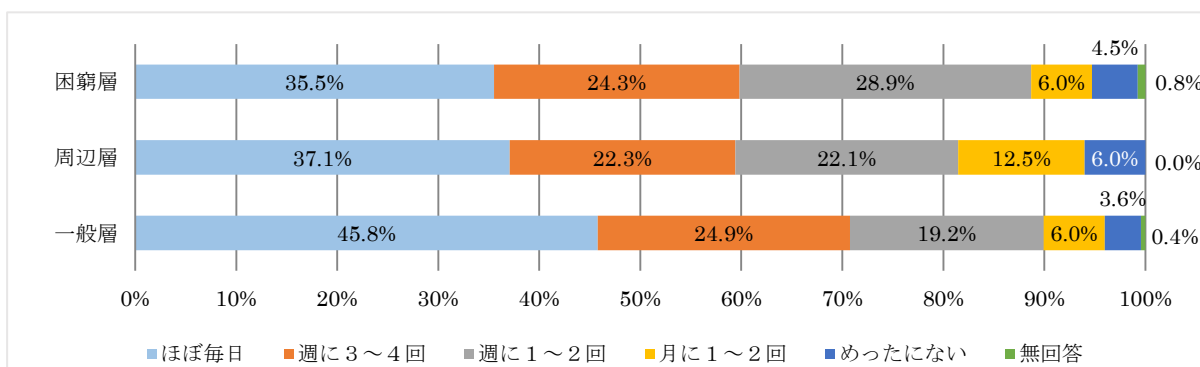
図表 6-3-11 子供と学校生活の話をする(小学 5 年生):生活困難度別(\*\*)



図表 6-3-12 子供と学校生活の話をする(中学 2 年生):生活困難度別(\*\*\*)

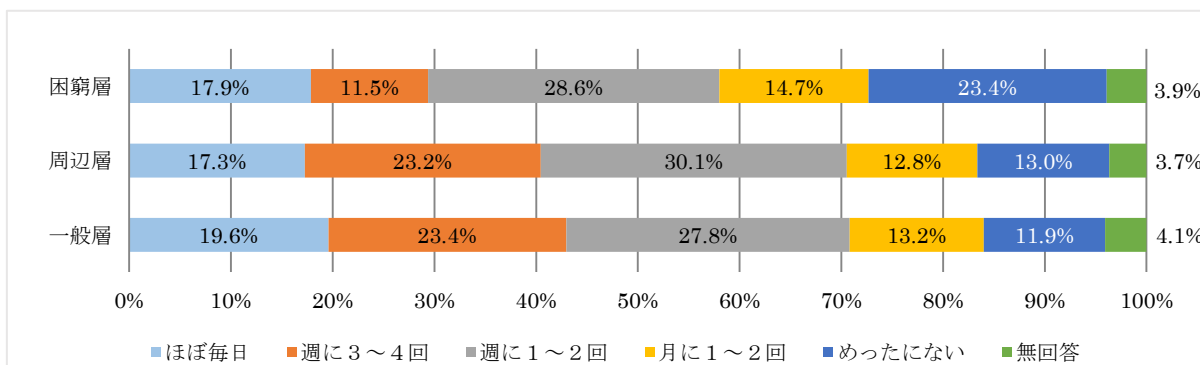


図表 6-3-13 子供と学校生活の話をする(16-17 歳):生活困難度別(\*\*\*)



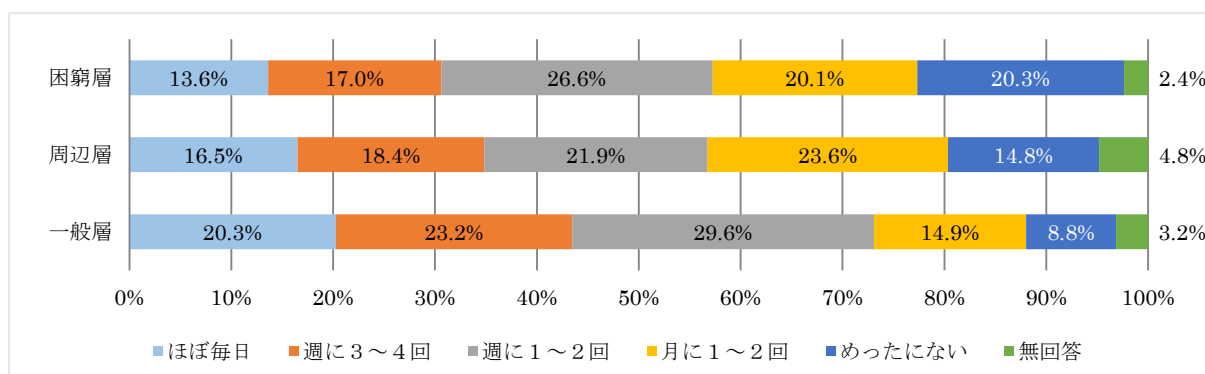
ニュースの話をする頻度についても、困窮層ほど低い傾向がある。ニュースについて週3回以上話す親子は、どの年齢層でも、一般層は4割を超えているのに対し、困窮層は約3割から約4割である。「めったにない」と回答した保護者の割合は、小学5年生の困窮層の保護者が23.4%（一般層：11.9%）、中学2年生の困窮層の保護者が20.3%（一般層：8.8%）、16-17歳の周辺層の保護者が22.3%（一般層：10.7%）であった。

図表 6-3-14 子供と政治経済・社会問題等のニュースの話をする(小学 5 年生):生活困難度別(\*\*\*)

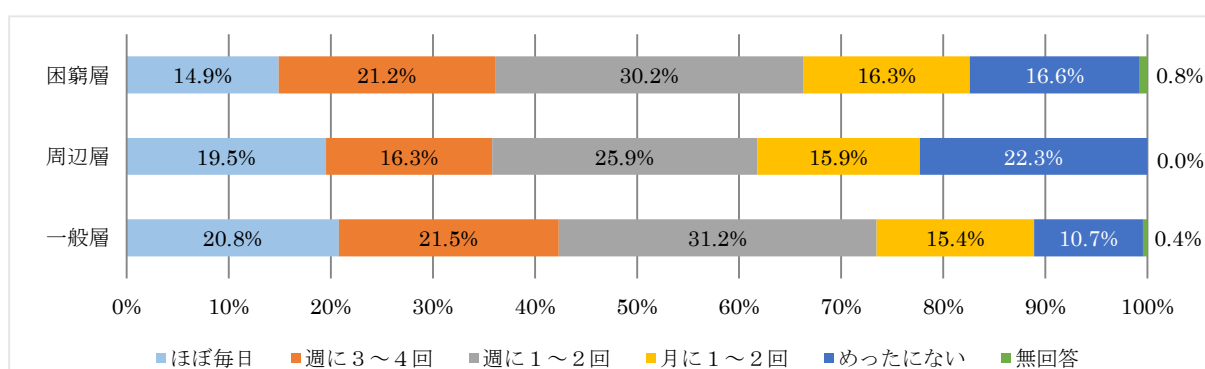




図表 6-3-15 子供と政治経済・社会問題等のニュースの話をする(中学2年生):生活困難度別(\*\*\*)

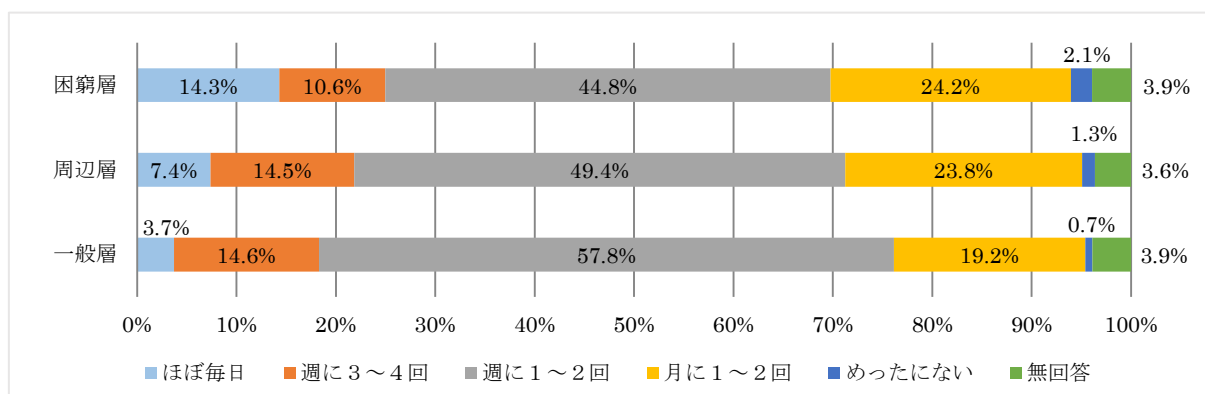


図表 6-3-16 子供と政治経済・社会問題等のニュースの話をする(16-17歳):生活困難度別(\*\*\*)

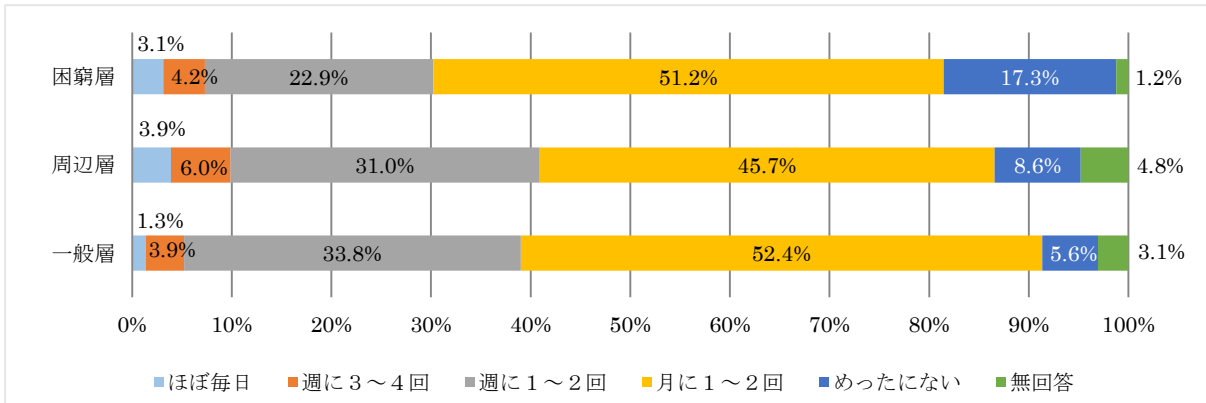


子供と一緒に外出する割合は、どの年齢でも生活困難度別に統計的に有意な差がある。週に3回以上一緒に外出する割合は、どの年齢層でも一般層よりも困窮層の方が高く、例えば小学5年生の一般層で18.3%であるのに対し、困窮層では24.9%である。また、小学5年生で親子一緒に外出するのが月2回以下(「月1~2回」「めったにない」)の割合は、一般層で19.9%であるのに対し、困窮層では26.3%である。親子でめったに外出しない割合は、中学2年生の一般層で5.6%であるのに対し、困窮層では17.3%、16-17歳の一般層で18.1%であるのに対し、周辺層で25.7%、困窮層は20.5%である。

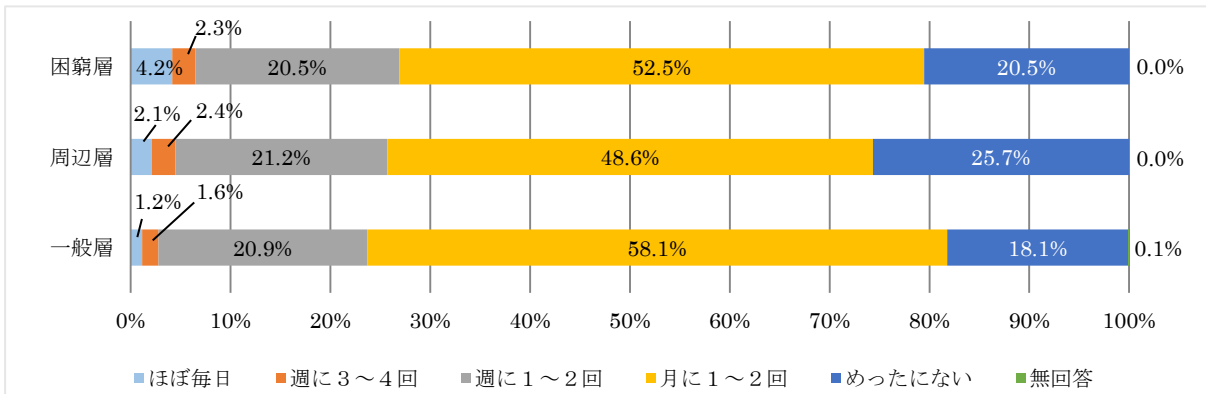
図表 6-3-17 子供と一緒に外出をする(小学5年生):生活困難度別(\*\*\*)



図表 6-3-18 子供と一緒に外出をする(中学 2 年生):生活困難度別(\*\*\*)



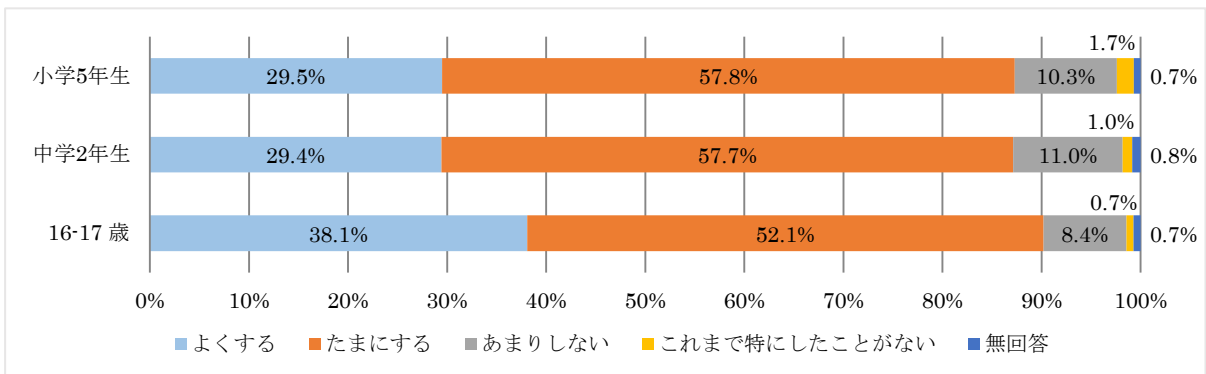
図表 6-3-19 子供と一緒に外出をする(16-17 歳):生活困難度別(\*\*\*)



## (2) 将来についての会話

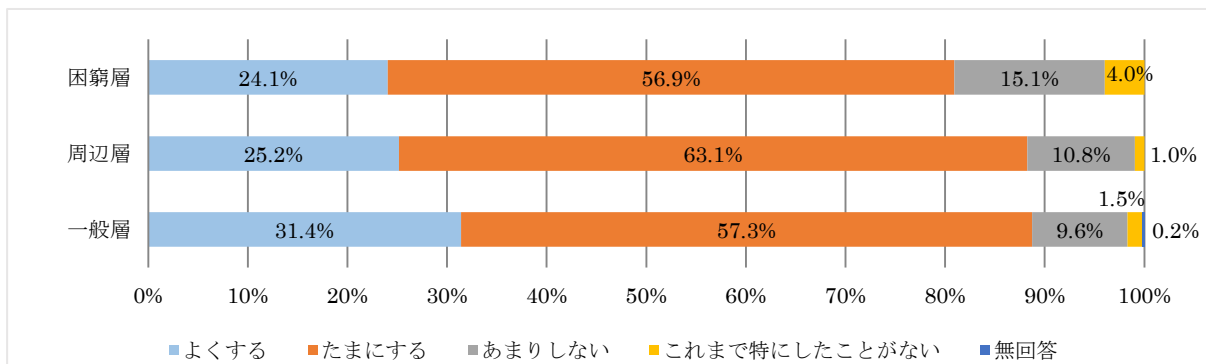
子供の将来(夢・進路・職業等)について、子供とどのくらいの頻度で話をするのかを保護者に聞いたところ、「よくする」は小学 5 年生と中学 2 年生の保護者で約 3 割、16-17 歳の保護者で約 4 割であった。「たまにする」を合わせると、すべての年齢層で約 9 割の保護者が子供と将来について話している。

図表 6-3-20 将来についての会話:年齢層別

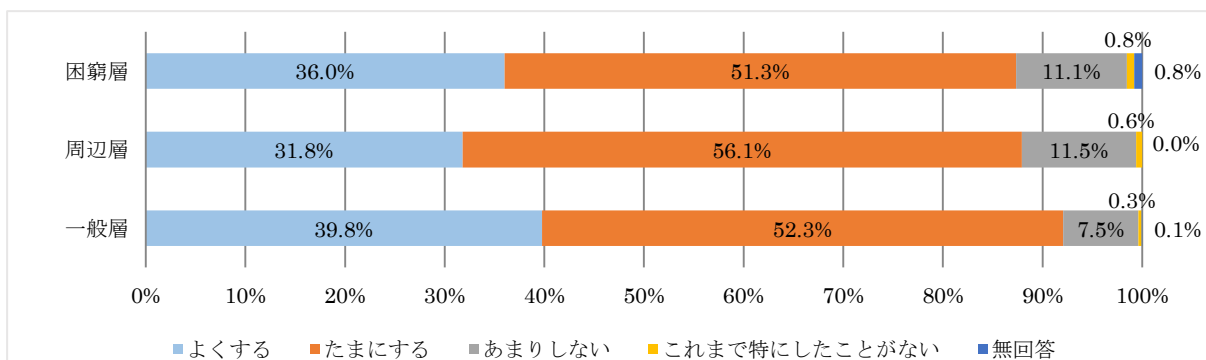


生活困難度別では、小学5年生と16-17歳で統計的に有意な差が見られた。子供と将来についての話を「よくする」割合は、小学5年生の一般層で31.4%であるのに対し、周辺層で25.2%、困窮層で24.1%と、生活困難度が高くなるほど低い。また、「あまりしない」、「これまで特にしたことがない」割合は一般層で11.1%であるのに対し、困窮層では19.1%と8ポイントの差がある。16-17歳では、「よくする」が一般層で39.8%であるのに対し、周辺層は31.8%、困窮層は36.0%である。「あまりしない」、「これまで特にしたことがない」割合は一般層では7.8%であるのに対し、周辺層、困窮層では、それぞれ12.1%、11.9%である。

図表 6-3-21 将来についての会話(小学5年生):生活困難度別(\*\*)



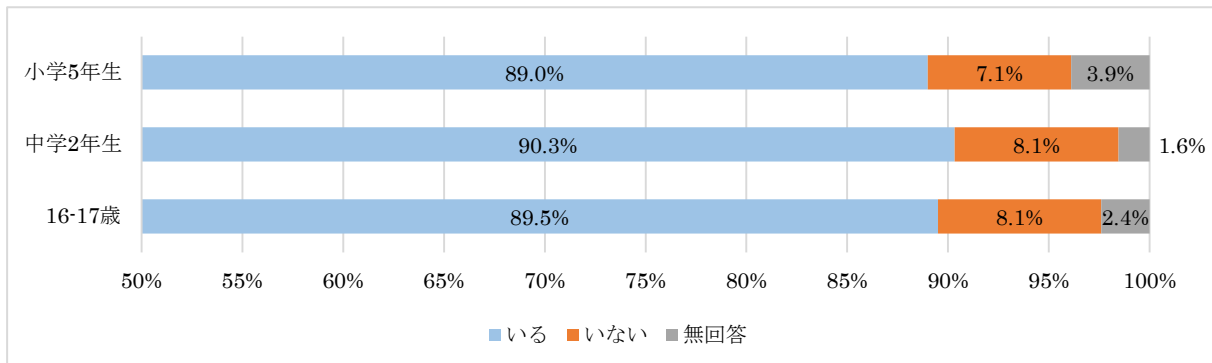
図表 6-3-22 将来についての会話(16-17歳):生活困難度別(\*\*)



## 4 相談相手

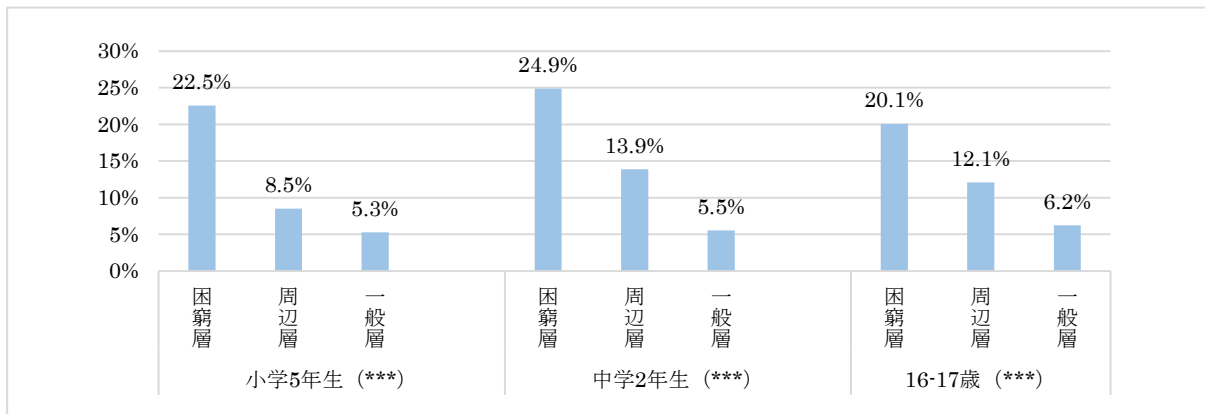
保護者に対し、「本当に困ったときや悩みがあるとき、相談できる人（家族、友人、親戚、同僚など）がいますか」と聞いた。図表 6-4-1 に、子供の年齢別に、保護者の相談相手の有無を示した。年齢によって大きな違いはなく、どの年齢でも約 1 割の保護者には相談相手がいない。

図表 6-4-1 相談相手の有無：年齢層別



相談相手のいない保護者の割合を生活困難度別に見ると、どの年齢においても、「困窮層」「周辺層」「一般層」の順に、相談相手がいない割合が高くなっている。一般層で相談相手がいない割合が 5.3%～6.2%であるのに対し、困窮層では 20.1%～24.9%と高い。生活困難度が高くなるほど様々な問題を抱えやすくなると考えられるが、困窮層ほど相談相手がおらず、社会的に孤立しやすい傾向にあるといえる。

図表 6-4-2 相談相手のいない保護者の割合：生活困難度別



相談相手のいない保護者の割合を世帯タイプ別にみると、どの年齢でも「ふたり親世帯」よりも「ひとり親世帯」の方が、相談相手のいない保護者の割合が高い。小学 5 年生と 16-17 歳ではひとり親（二世帯）世帯がそれぞれ 12.9%、12.3%と最も高い。中学 2 年生ではひとり親（三世帯）世帯が 16.2%で最も高い。

図表 6-4-3 相談相手のいない保護者の割合：世帯タイプ別

